

古典和歌を理科の知識と対比させる教材案

——「水底」と物理・「紅葉」と生物——

大塚 誠也

国語科の古典関連の教科書には和歌が採録されている。そのほとんどは著名な選集からの抜粋で、秀歌選の形式を取っている。現行の形式は、和歌の技法や文学史の学習、有名歌の鑑賞には適しているといえよう。

しかし現存する和歌の総数は膨大であり、『新編国歌大観』収載歌は四五万首にのぼる。おびただしい数の和歌を通覧もしくは検索すると、歌語ごとに通ずる詠み方をいくつも見つけることができる。例えば時鳥の初音や鹿の妻恋い等だが、これらは古典和歌がどのように世界を把握し、どのように美意識を形成していたかを物語るものである。これらパターン化した詠み方は現代人に知られていないものが大半であるし、中には現代人の常識に反するものもある。この古典和歌が有する特質を、国語教育に活かさなくてよいのか。稿者はかつて国語表現における短歌教材の可能性を論じたが⁽¹⁾、詩歌は現・古を問わず依然として可能性を秘め

続けている。

本稿は、古典和歌に見える特定の詠み方のうち、現代人の科学知識と相反するものを教材として提示する。現代人は、光の反射は水面で起こり、紅葉は気温の低下によって進行すると考えている。しかし古典和歌の世界ではどうか。現代人が信じて疑わない科学知識を古典和歌が揺り動かすとき、古典は「役に立つかどうか」という審判を受ける側から、現代人を挑発する側へと回る。

この「古典が／文学が何の役に立つか」とは言い古されたセリフだが⁽²⁾、古典は現代人の常識を相対化する装置となりうる。現代人ないし学習者にとつて古典が常識を再考させる契機となるとき、「役に立つか」という一元的な問いはそこに存在しない。古典とは現代人の理解がいまだ十分に及ばない研究対象であり、かつ一括りに「古典」と規定できるほど矮小な研究領域でもない。現代人になじみの深い理科

の内容と古典とを相克させながら学習者に提示して、古典和歌の特質を批判的に考察させることが本教材案の目標である。一応、あえて学習指導要領に即して目標を述べれば、「我が国の言語文化の担い手」として言語をめぐる資質・能力を獲得させることも換言できる。

以下、一節で関連する先行研究に触れた上で、二節で「水底」を詠む歌群を物理科目と対比させながら教材案として示す。三節で水底歌群の表現史的な補足を行ない、四節ですらに発展的な教材案を示す。五節では「紅葉」を詠む歌群を生物科目と対比させながら教材案として示す。六節で紅葉歌群の表現史的な補足を行ない、七節ですらに発展的な教材案を示す。

いずれも膨大な用例数を持つ歌群である。教材案として掲出する和歌は、和歌単体で解釈できるもの、歌意や文章構造が平明なもの、教育現場で鑑賞に堪えるものを優先する。引用に際しては紙幅の都合で詞書を省略し、通釈も最低限に留める。諸注釈書も参照されたい。また学習者の主体的な学び、すなわちアクティブ・ラーニングを企図した発問例をそのつど示す。発問例も含めて教材案である。

なお稿者は本教材案の一部を勤務校（高知大学）のオンラインオープンキャンパス模擬授業『古今和歌集』は高校理科を攻略できるか¹⁾ですでに実施している（図1）。本教材

案は高校生が理解できる大学の教養科目というデザインであり、対象学年は高大両方である。スライドで使用した図を各節で紹介するが、動画自体も Youtube で視聴可能である²⁾。

1-1 先行研究について

本稿に関連する先行研究について整理すると、和歌教材の研究と教科横断の研究に二別できる。

まず和歌教材についてだが、散文教材には劣るものの脈々と研究成果が報告されている。注目される近年のものとして、梶川信行氏等の教科書の編纂方針に対する批判的な分析、小林賢太氏の研究史の整理と私家集の教材案、大石真由香氏の『万葉集』原文と訓釈の教材案、中村佳文氏の活動型学習の理念と実践例等があげられる³⁾。諸氏は程度の差こそあれ、既存の教材に対する批評の姿勢と、新たな教材案を有する点で共通する。これは本稿も踏襲するところだが、いわゆる和歌の類型

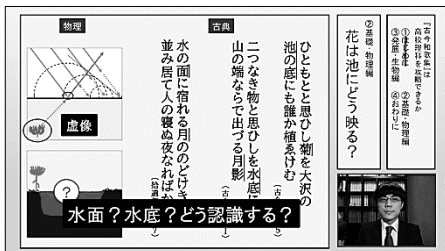


図1 実践した模擬授業

を実践的に教材とした点が新奇といえる。

つぎに教科横断についてだが、現行の学習指導要領がまず関わる。中学版も高校版も、教育活動全体を見通したカリキュラム・マネジメントの観点から、他教科と国語科の関連づけの重要性を繰り返し述べる。これはコンピテンシーとも称される資質・能力の育成を目指したものである。国語科の指導要領中では、言語能力の育成や外国語科との連携が強調されている。詳しくは原文を参照されたいが、畑綾乃・小松俊介両氏や阿久津慎也・今野百恵両氏の実践報告も参考となる⁵⁾。本稿もコンピテンシーの重要性には賛同するが、あくまで教材作品の内容そのものを議論の中心に据える。

さらに教科横断に関しては、STEAM教育がブームである。これは文系理系の枠にとられず教科横断的な学習を行なわせながら、課題解決能力を獲得させるという教育である。すでに複数の実践が報告されており⁶⁾、論文教やプロジェクト数が近年顕著に増加している。古典学習関連では井村有里・田中寛子両氏の『枕草子』と地学をめぐる実践報告、井村有里・西村聡太郎・田中寛子・岡本義雄四氏の『源氏物語』野分巻と地学をめぐる実践報告、峯悦子・下村香菜子・藤井佑介三氏の姨捨伝説と地学めぐる実践報告が確認できる⁷⁾。本稿も教材の取り合わせという点で同形式だが、古典和歌と理科の知識とが対立するというコンセプトが強みである。

その対立を契機として、古典和歌の特質に対する批判的な考察を目指す。無論だが、批判とは否定でなく検証やメタ認知を指す。

二 「水底」の和歌と物理

本節は光の反射を詠む和歌を段階的に学習者に紹介し、複数の考察を行なわせる案を提示する。これにより学習者の思考力を育成する過程で、古典和歌独自の世界を理解させることができる。

まず授業の導入の発問として、全く情報を示さずに「平安の歌人は菊が池に映る情景をどのように詠むか」等を提示することができる。あるいは後掲図2や図3のようなイメージをあえて初めに示し、物理の知識を喚起してミスリードを誘うのも有効である。ミスリードは古典和歌の特質を強く印象づけることにつながる。

その上で光の反射を詠む古典和歌だが、成立の早いものは水面でなく水底に姿が見えるという表現を多く取る。

A 水底反射

1 吉野河岸の山吹吹く風かぜに底そこの影さへうつろひにけり

『古今集』一・二四・紀貫之

2 一本ひとぽと思ひし菊きくを大沢おほはたの池いけの底そこにも誰たれか植うえけむ

(同二七五・紀友則)

3 風吹けば落つる紅葉葉水清み散らぬ影さへ底に見えつつ

(同三〇四・凡河内躬恒)

4 二つなき物と思ひしを水底に山の端ならで出づる月影

(同八八一・紀貫之)

5 涙川底は鏡と清けれど恋しき人の影も見えぬも

(『興風集』三五)

『古今集』の時点で多種多様な水底反射が確認でき、景物はそれぞれ山吹、菊、紅葉、月、恋人、水底はそれぞれ川、池、水となっている。4も詞書から池の場面と判断できる。なお3のみ筑摩書房の『言語文化』と大修館書店の『古典探究』が採録しており、教科書をそのまま用いることもできる。

いずれも『古今集』時代の歌である。一応上代にも「藤波の影なす海の底清みしづく石をも玉とぞ我が見る／藤奈美能影成海之底清美之都久石乎毛珠等皆吾見流」(『万葉集』四二二三・大伴家持)がある。「影なす」が「海」でなく「海の底」に掛かるとすれば和歌における初例だが、稿者は海底に影が映る意には解さない。次節で引用する漢詩表現も参照されたい。

中学一年の理科には「反射の法則」があり、高校の物理または物理基礎には「ホイヘンスの原理」がある。詳しくは各教科書を参照されたいが、スライド例の図2や図3のよう

な視覚的イメージをAと併せて示し、まずは現代人の科学知識と大きな相違がある前提を確認したい。

この時点で、本格的な発問ができる。例えば「古典和歌はなぜ水底で反射すると詠むのか／なぜ水面で反射すると詠まないのか」と問える。解答例として、「当時の人々は本当に水底で反射していると認識していた」や、「写実に反した伝統的な表現技法が定着していた」等が想定できる。他にも文学史を学習済みであれば、「古今調の論理的な構造に適合しているから」という推測が想定される。物理の学習内容に引き付けて、「反射した虚像は水面より奥に存在するように見えるから」という推測もありうる。学習者が考えあぐねるようであれば、考察のつかかりとして右の観点を部分的に示したほうがよい。稿者の模擬授業は録画配信形式であったため、稿者自身が図4のように虚像の可能性を示した。他の発問例として「水底の影の和歌は、どのような情景が

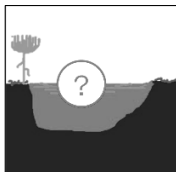


図2 反射の法則

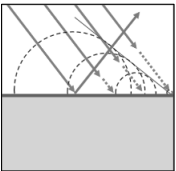


図3 ホイヘンスの原理

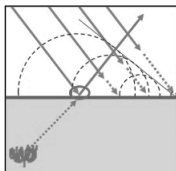


図4 虚像の見え方

特に好まれたか」等、和歌同士の比較検討を行なわせることもできる。風に散る景物や近景の水辺があげられよう。ちなみに月の歌も多い。

あるいは稿者は専門外だが、物理の学習に引き付けた発問や課題をこの時点で提示できる可能性もある。物理は選択者と非選択者が混じるクラスもあるだろうが、それを逆手にとりピア・ティーチング的な課題も設定可能か。

つぎに、反射の和歌の問題を考える上で看過できない歌群を紹介する。歌数はA水底反射ほど多くないが、実は水面に姿が見える和歌も同時代に存在する。

B水面反射

6 水の面にしづく花の色さやかにも君が御影の思ほゆるかな
〔古今集〕八四五・小野篁

7 水の面に宿れる月ののどけきはなみりて人の寝ぬ夜なればか
〔拾遺集〕一一〇七・源順

8 袖ひちて我が手に結ぶ水の面に天つ星合ひの影を見るかな
〔長能集〕七六

9 水の面の色さへ澄める秋の月波こそ影を洗ふべらなれ
〔三条左大臣殿前栽歌合〕一・大中臣能宣

10 君が代に一度澄める水の面に千年の松の影ぞ映れる
〔左大臣家歌合長保五年〕三四・橘為義

6の篁歌が最も古いが、「しづく」の語感から水面下に像が

存在するとも取れるような、複雑な歌例である。6単体を考察対象とする発問もありえよう。Bも景物は花、月、七夕の夜空、松と多様だが、水面は池が多い傾向にある。

それではA水底歌群とB水面歌群が同時代に併存していることをいかに考えるべきか。例えば小町谷照彦氏は旋頭歌「増鏡底なる影に向かひみてる時にこそ知らぬ翁に会ふ心地すれ」〔拾遺集〕五六五)に対し「映像は底にある、と受け取るのが当時の通念」と注し、石川泰水氏も同様の見解を示す⁽⁸⁾。鏡と「底なる影」の歌例は「ふたみ山ともに越えねど増鏡底なる影をたぐへてぞやる」〔後撰集〕一三〇七・詠人不知)も早い。漢語「鏡底」は『大漢和辞典』では近世以降の用例しかなく、和語が先行するかと推測される。稿者は模擬授業において、情報過多にならないよう鏡関連の用例や水底／水面それぞれの厳密な初例には触れなかった。結局のところB水面歌群は存在しているのであり、A群とB群をどう考えるかという問題に帰着する。

発問「水底の歌群と水面の歌群の併存をどう考えるか」だが、解答例として、「歌人によって認識や美学に差異があった」や、「はじめ水底派が優勢だったが次第に写実的な水面派も増加した」、「昼の景色と夜の景色」で一定の傾向があった」等が想定できる。どちらの歌群も多様な詠みぶりが揃っているため、この発問は端的で平明な主張を行ないがたい。

水底／水面の問題は、規則性を持ちながらも混然としてい
る。単元全体として、明確な問題解決を目指すことより、精
読や考察を通じて古典和歌の実態を感得させることを目指
したい。

三 水底／水面の表現史

水底と水面の表現史については以下のように補足できる。
これまでの発問に対する一応の解答となる箇所もあるが、
専門的な内容であり学習者にどこまで示すかが問題となる。
稿者は模擬授業において以下の説明は行なわなかった。

まず水底だが、漢詩に由来を持つ可能性が高い。渡辺秀夫
氏は4貫之歌を「水中の月」を詠じるとして漢詩の撰取を指
摘する⁹⁾。管見ではさらに『芸文類聚』の「水底罌罌出、萍
間反宇浮」(卷六三・樓・水中樓影詩)や『全唐詩』の「時
見水底月(一作有時池底山)、動揺池上風」(卷三七五・孟郊・
遊城南韓氏莊)、「花影沈波底、煙光入座隈」(卷七五〇・李
中・題徐五教池亭)を確認している。これらは「水底」に物
が映る言い回しそのものである。

日本国内の文献では『土佐日記』につきの一節がある。

昔の男は、「棹は穿つ波の上の月を、舟は庄ふ海の中の
空を」とはいひけむ。聞き戯れに聞けるなり。また、あ

る人のよめる歌、

水底の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるら
し (三一頁)

諸注は賈島の詩として「棹穿波底月、舟庄水中天」を典拠に
指摘してきたが、近年長谷部剛氏はこの詩句が後世の創作
であること、中国で「棹穿波上月」と書かれた磁器が出土し
ていること等を踏まえて、日本には「棹穿波上月」と本文を
作るテキストが伝来していたと新たに述べた¹⁰⁾。その場合は、
貫之が「波底月」という漢詩表現に接していた確証が存在し
なくなる。ただし『土佐日記』中で直後に「水底の月」と詠
む和歌がある点をどう考えるべきか等の疑問は残る。長谷
部説は『土佐日記』注釈史の転換点となるだろうが、水底の
表現史について稿者は容易に判断を下せない。

稿者は、いずれにせよ水底反射の表現は『古今集』時代に
漢詩から撰取されたものと考ええる。なお神田龍身氏は貫之
の歌風を鏡像という観点から詳しく分析している¹¹⁾。

つぎに水面だが、こちらも関連しうる漢詩の表現を見出
すことはできる。先に引用した『土佐日記』中の詩句の他に、
『全唐詩』に「酒中浮竹葉、杯上寫芙蓉」(卷五・遊九龍潭・
則天皇后)がある。ただし水底に比べ水面の漢詩は論じがた
い。例えば「水上月」とあってもそれは空に見える月の場合
が多く、水に映る月かどうか判断が容易でない。

また日本では詩題や歌題として「月影浮秋池」(『日本紀略』延喜九年閏八月十五日)、「花光浮水上」(『和漢朗詠集』一一六・菅原文時)、「水上秋月」(『三条左大臣殿前栽歌合』序)が水面反射を指す漢詩的な表現といえる。「花光浮水上」は『本朝文粹』三〇一で源順も同一表現を用いている。

ただし先に引用した6の篁歌は和歌として右に先行するし、「水の面の深く浅くも見ゆるかな紅葉の色ぞ淵瀬なりける」(『躬恒集』一〇一)という早い例もある。加えて「面」という字は漢詩的な用例に見えないことも指摘できる。

これらを勘案すると、水面反射に関しては漢詩表現の摂取を積極的に想定するよりも、「水の面」という歌語と反射を結び付ける詠み方が自然発生的にまず成立したと考えたほうがよさそうである。

そして水面反射の歌群は、詠まれる場の特徴的な傾向が生じるようになる。先に引用した9は藤原頼忠歌合の月、10は藤原道長歌合の松の詠だが、いずれも邸宅褒めの祝賀的な雰囲気を持つ。両歌合では水面／水上を詠む和歌が他にも多数出詠されており、水底を詠む和歌の数を超えている。頼忠の方は題に「水上」とあるため当然ではあるが、その題まで含めて祝賀にふさわしい表現が形成されていたのだと考えられる。『荣花物語』中にも類歌がいくつか見えるが、水面反射の詠み方は平安中期から後期にかけて、祝賀

を象徴する側面を獲得したようである。なお頼忠歌合については一瀬恵理氏、山本真由子氏の論稿がある¹⁰⁾。

四 水底／水面の発展的な教材

本節では前節までの内容を踏まえた上で、古典和歌の表現方法をより学習できる教材案を二つ示す。中等教育でも実施できるような発問例も併せて示す。

一つ目は、皇子中宮女房と藤原高遠の贈答である。

C 菊の贈答

11 水の面に影ぞ映れる菊の花色の深さを見するなるべし

返し

12 水底に影を映せば菊の花忍び忍びに波や折るらむ

〔大式高遠集〕七七・七八)

11で女房が水面に映る菊を詠んだのに対し、12で高遠は水底に映る菊を詠み返している。この贈答から、少なくともこの時代には水底と水面の表現は容易に相通じたのだと推測される。類例として『拾遺集』四四一・四四二の配列もある。Cの細かい点にさらに着目すると、11は水面なのに深さを詠み併せ、12は水底なのに波を詠み併せるちぐはぐさが看取される。

発問は「11はなぜ水面と深さを、12はなぜ水底と波を詠み併せるのか」が提示できる。鑑賞的な観点からそれぞれの表現効果を解答させるのがよさそうだが、例えば11は水面とあえて詠み始めることで、下の句の水深というイメージへの飛躍が効果的になるといえる。12は観察者から遠くの水底に菊を配置することで、忍び忍びに折るといふ密やかな動作が成立しているといえる。

あるいは発問は「水面で詠みかけられたのに、高遠はなぜ水底と詠み返したのか」という形式でもよいだろう。根拠を示せていればどんな解答でもよいが、例えば「11下の句の水深表現から水底を連想したから」や、「忍び忍びに折るといふ発想がまずうかび水底でないと一首が成立しなかったから」等が想定される。いずれにせよ、発問を通じて水面と水底のイメージの差異、他の歌句との関係性を主体的に考えさせたい。

二つ目は、貫之歌とそれへの言及を含む判詞めいた一節である。

D 貫之歌とその解釈

13 篝火の影しるければ鳥羽玉の夜川の底は水も燃えけり

14 篝火の隙しなれば夜しもぞ鶺鴒川の底は隠れざりける

映れる影、水の燃ゆるやうに見ゆるこそ道理にはあ

『貫之集』一〇

れ。底のあらはに見えむはいと難くや。ただ常にあることによく候ふぞ。また貫之が詠みたるは、まことの水の底にやは。ただ水を申す、やうに、篝火の光はいとあらはなることなれば、水の下まで入らず見えにて候ふかし。

『永承六年』夏 六条齋院禊子内親王歌合「一〇」

13は詞書から延喜六年の月次屏風歌とわかるが、二句目に「影し映れば」等の本文異同があり、北井佑美子氏の詳しい検討がある¹³⁾。川底の水が燃えるという表現は篝火の反射である。

14と判詞めいた一節は萩谷朴氏の詳しい考察があるが¹⁴⁾、貫之歌からおよそ一五〇年ほど後の歌合で、14は源頼實歌、判詞めいた一節は源頼綱のものと推断されている。ひとまが首肯されるが、詳しくは萩谷著書を参照されたい。

判詞めいた一節は14に対して、篝火が川底を照らすという非現実性を批判している。この判者は水底反射の表現と水底照射の表現を混同しているらしいがあるが、それでも「貫之が詠みたるは、まことの水の底にやは。ただ水を申す、やうに」は注目される。ここは解釈の確定が難しいが、「申すやうに（おぼゆ）」等と省略で文が切れれば「貫之が詠んだのは本当の水底ですか、いや違うでしょう。ただ単に水のことを言ったように（思われます）」という解釈になる。萩

谷氏は「やうに」が「あらはなる」に掛かると見て解釈している。あるいは「申すやうに」は直後を挿入句として「水の下まで……」以降に掛かるといふ解釈も可能か。稿者は省略で文が切れると見るのが穏当だと判断するが、いずれにせよこの判者が「夜川の底」は川底そのものでないと主張している点は動かない。

発問として、素直に「13の「夜川の底」を夜川だけの意で解釈するのは是か非か」が設定できる。判者の主張に引き付けて考えれば、「篝火の反射はさすがに川底にあると見えなから是」と主張することができる。ただし是とした場合は、既習の水底反射の歌群も整合性を持たせて解釈すべきかという問題が出る。篝火は「あらは」なので特別枠であり、花や月の反射であれば水底でもよいということか。この発問は、古典和歌が類型表現の集積によって虚構世界を構築していることを学習者に再確認させる。余裕があればさらに、「あなたはこの判者の写実的な観点を重視するか、類型表現も意識しているような論調を重視するか」という問題も学習者に問いたい。

なお、写実性が関わる歌に「池水ののどけき底に影な見そさるは鏡に見ゆる水際を」（冷泉家本『海人手子良集』九一）がある。池底に姿を映すのではなく、鏡のようによりよく見える水際を使いなさいという歌意である。底面反射を

現象として認めつつも、現実的に視認性が高い水際に言い及ぶという特異な歌である。他の歌群と組み合わせにくいのが、教材としてのポテンシャルがあるため付言しておく。

以上、二つの教材案を示した。Cは本文の解釈が容易で具体的な問題が考察できるタイプ、Dは本文の解釈が難解だが理念的な問題が考察できるタイプだった。いずれもこの単元のまとめとして据わりのよい内容である。

五 「紅葉」の和歌と生物

本節は紅葉のメカニズムを詠む和歌を学習者に紹介し、複数の考察を行なわせる教材案を提示する。二節と同様に学習者の思考力を育成する過程で、古典和歌独自の世界を理解させることができる。

授業の導入では、発問「紅葉はなぜ赤くなるのか」や「平安の人々ほどのようなメカニズムで紅葉が赤くなると考えていたか」等が設定できる。後述するが紅葉のメカニズムは教科書範囲外になっており、科学的な説明ができる学習者は少ないと予想される。

その上で紅葉に関する和歌だが、時雨や露が紅葉を発生させるという詠み方が多数存在する。

E時雨や露により発生する紅葉

15 時雨待つ外山の紅葉薄からじとく降りそめよ色の濃さ見
ん
〔大式高遠集〕一三五

16 いと早も鳴きぬる雁か白露の色どる木木も紅葉あへなく
に
〔古今集〕二〇九・詠人不知

17 神無月時雨に染めて紅葉葉を錦に織れる神奈備の森

〔貫之集〕五一七

このパターンは山や森の叙景歌が多く、鑑賞に堪えるレパートリーを揃えるのに工夫がいる。例えばEは勅撰集的な時系列で並べてあり、15は降雨も変色もまだの時点、16は木々がいまだ変色しきらない時点、17は錦と言えるほど見事に変色した時点である。また詠みぶりは、15は作中主体の強い希求が特徴的、16は雁を取り合わせた上下空間の拡がりが特徴的、17は一首全体が最後の「神奈備の森」に掛かる雄大な叙景が特徴的といえる。もつとも、稿者の模擬授業は資料配布ができずスライドのスペースも限られていたので、「白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり」〔古今集〕二六〇・紀貫之)のみを代表例として示した。時雨と露を同時に紹介できる一首である。

この時点で、ひとまず古典和歌を対象とした発問ができる。「時雨もしくは露は紅葉を発生させるのか」が提示できる。まず多くの学習者が否定的な考えを抱くと予想される。和歌をどう解釈すべきかまで問えば、解答例として、「葉の

表面が濡れて色が濃く見えていたのだろう」という推測や、「気象の推移と季節の進行が一致して気象と紅葉に因果関係を見出してしまったのだろう」という推測が予想される。あるいは教授者がヒントを示しながら、文学的な問いと解答に誘導することもできよう。15の「降りそめ」の掛詞や、16の「色どる」が「色づく」と違い他動詞であること、17の「時雨に染めて」の手段の用法等に着目させれば、あくまでEの歌群に限ってではあるが、水による染色の表現が共通するとわかる。染色の表現を明確に持たない歌例もあるため悩ましいところだが、科学知識と相反する詠み方への違和感をこの時点で明確にしておく、その感覚がこれ以降の学習で役立つ可能性がある。

つぎに、Eの歌群と対比できるFの歌群を提示する。数は多くないが、時雨や露が紅葉を発生させるメカニズムに疑念を呈する詠み方が存在する。

F時雨・露に対する疑念

18 白露の色は一つをいかにして秋の木の葉を千々に染むら
む
〔古今集〕二五七・藤原敏行

19 秋の野の錦のごとも見ゆるかな色なき露は染めじと思ふ
に
〔後撰集〕三六九・詠人不知

20 いかねれば同じ時雨に紅葉する柞の森の薄く濃からん
〔後拾遺集〕三四二・藤原頼宗

いずれも変色の原因を時雨や露と考える立場でありながら、その上で18は単色の露はどのような方法で様々な色を染めているのかという疑念、19は無色の露が染めることはあるまいかという疑念、20は同じ条件で時雨を受けた木々に濃淡の差が生じるのはどうかという疑念を詠む。ちなみに19のように野辺の開けた景色を詠むパターンも存在する。「夜な夜なの 曉露に宮城野の萩の下葉や色づきぬらむ」〔『行宗集』二二八〕などは時間感覚に優れており、鑑賞に適する。

それでは、E紅葉歌群とF疑念歌群が同時代に併存している問題をいかに考えるべきか。発問としては「平安の人々は時雨や露が紅葉を発生させると考えていたか」が考察しやすいだろう。解答例としては、肯定派は、やはりF歌群も染めること自体は認めている点を主張すると予想される。否定派の材料としては、18の白露や19の無色の露という認識を踏まえて、E全体の染色のイメージが当時としても現実的でないことがあげられる。

また20は同一条件下における観察と見なすことができ、この特質を活かす発問も設定できよう。例えば発問「F歌群の中で最も問題解決的な問いを立てているものはどれか」は、E歌群を十分に活かさないもののF歌群の精読と考察を促せる。この問いでは本稿七節に掲出する『玄玉集』七〇

三を並べてもよい。

稿者は模擬授業でEとFの対立に相当する話をした後で、紅葉・パートのまとめにむけて生物分野の知識を解説した。解説には色素を表現した図5の画像を用いた。あるいは生物の専門家の協力があれば、より早い段階で予習的な課題を設定することも可能だろう。ただし先述したが紅葉のメカニズムは教科書範囲外であり、その点が懸念材料となる。旧課程では東京書籍の『改訂生物』（二〇一八年）のみがコラムとして紅葉のメカニズムを載せており、クロロフィルの分解やアントシアニンの合成が解説されていた。しかし新課程では全社が紅葉を扱っておらず、生物基礎の「バイオーム」と生物の「植物の環境応答」の落葉がかるうじて関連している。

紅葉のメカニズムを生物学的に学習した後では、科学的な立場から古典和歌を検証する発問や課題が設定可能となる。降雨は日照や一日の寒暖差と関わるし、葉の表面に水分が付着することも変色に影響を及ぼすだろう。降雨等が紅



図5 紅葉と色素

葉に影響するという結論になれば、和歌に詠まれるような染色ではないものの因果関係はあるということになる。反対に生物学的には降雨等が紅葉を阻害するという結論になったとし

ても、その過程で古典和歌と生物分野の知識は蓄積される。単元全体として、精読や考察を通じて古典和歌の実態を感得させることに加え、古典和歌と生物分野を相互の視点から批判的に検証させることを目指したい。

六 紅葉と染色イメージの表現史

紅葉と染色イメージに関する表現史は以下のように補足できる。ただし専門的な上に情報過多となるため、学習者にとって示すかが問題となる。稿者は模擬授業においては水底反射のケースと同様、以下の説明は行なわなかった。

まず紅葉についてはまとまった先行研究がある。鈴木宏子氏は二編の論稿において平安和歌の紅葉を詳細に論じている¹⁸⁾。鈴木氏は、時雨や露等が紅葉を発生させる例が『万葉集』から存在することを指摘している。例えば「秋の露は移しにありけり水鳥の青葉の山の色づく見れば／秋露者移尔有家里水鳥乃青羽乃山能色付見者」(一五四七・三原王)、「隠口の初瀬の山は色つきぬ時雨の雨は降りにけらしも／隠口乃始瀬山者色附奴鍾礼乃雨者零尔家良思母」(一五九七・大伴坂上郎女)等だが、詳しくは巻八と巻一〇を参照されたい。豊富な歌例があり、『万葉集』のみで紅葉のメカニズムの単元を構成することも可能である。

つぎに漢詩からの影響だが、鈴木氏は露について検討している。ただ、漢詩において露が紅葉を染める確かな例は『新撰万葉集』以外で掲出されておらず、管見にも入らない。時雨も漢詩の例が確認できなかった。現時点では、時雨と露による紅葉が漢詩に由来する可能性は低いのではないかと推察される。露や時雨が紅葉を発生させるという発想及び表現は、万葉歌において成立したとひとまず考えたい。

つぎに比喩としての染色のイメージだが、平安時代には多様なバリエーションが確認できる。

G様々な染色のパターン

21 海にのみひちたる松の深緑いくしほとかは知るべかる

らん

みづ おも (春雨)

〔拾遺集〕四五七・伊勢

22 水の面に綾織り乱る春早雨や山の緑をなべて染むらん

なげ

なみだ おも

〔伊勢集〕一〇三二

23 嘆きつつ涙に染むる花の色のおもふほどよりうすもある

かな

〔能宣集〕三五六

21は海水が松を染めるイメージ、22は春雨が山の木々を染めるイメージ、23は涙が花を染めるイメージだが、この花は詞書から紅梅とわかる。伊勢の歌が重複したが、22は『新撰万葉集』二五五に類歌がある。また23は紅涙だが『古今集』二五八の雁の涙が秋の野を染める歌と通じる。Gは一応教材に適しそうな歌例を抜粋したが、染色のイメージはより

広範な年代と歌人が共有している。

ここでは染める物体がすべて液体であるという共通点が注目される。これは当時の染色技術ないし染色作業によって生まれた発想と考えられる。前節では時雨・露と紅葉の関係に限って教材案を提示したが、染色のイメージを用いた詠み方はより多様な歌群を形成していた。この点は次節の発問例で再び触れる。

七 紅葉の発展的な教材案

本節は前節までの内容を踏まえた上で、古典和歌の表現方法をより学習できる教材案を二つ示す。中等教育でも実施できるような発問例も併せて示す。

一つ目は、紅葉の要因についての多様な詠み方の歌群である。

H様々な紅葉の要因

24 風寒み我が唐衣打つ時ぞ萩の下葉も色まさりける

〔拾遺集〕一八七・紀貫之

25 紅葉葉の紅深き色見れば水底までや霜は置くらん

〔清正集〕三二二

26 薄く濃く染めかけてけり立田姫紅葉の錦村村に見ゆ

〔堀河百首〕八六三・紀伊

24は風が冷たいために萩の下葉が色づく歌、25は詞書を見るに、水底に見える紅葉の深紅は霜によるかという歌、26は秋の女神である竜田姫が紅葉を染める歌である。25は難解だが、例えば期末試験の発展問題に使用できるか。なお霜によつて紅葉するという詠み方は漢詩に由来を持つ。『大漢和辞典』の「霜葉」項に複数の用例が載るが、森田直美氏も和漢の紅葉を扱った論稿で触れている¹⁶⁾。

風・霜は時雨・露と同じ気象、竜田姫のみ伝承で大きく異なるが、いずれも紅葉の要因という点でブルーピングできる。稿者の模擬授業では、多様な詠み方の一例として24のみ紹介した。

発問としては、多様な情報を扱わせるものがよいだろう。例えば「紅葉の要因を整理するとどのような図になるか」と問えば、景物ごとの特徴を押さえさせながら、それらの相違点と共通点を考察させることができる。竜田姫や風は他とどの程度遠いか、時雨と露と霜は互いの距離感をどう図示するか等、学習者は各景物を詳しく考察することになる。

この発問はさらに二種類の発展型を提示できる。一つは「なぜ霧や雪は紅葉を発生させないのか」等の、紅葉の要因とならない景物を巻き込む形式である。「霧は他と違い白く視認されるから」等が解答例として想定されるが、紅葉の要因という問いを裏側から考察させることができる。もう一

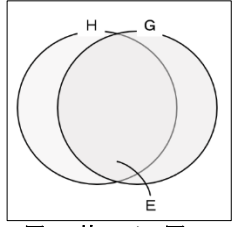


図6 梓のベン図

つは前節Fの染色パターンを考察対象に加えて、「紅葉の要因グループと染色グループはどのように図示できるか」といった、ベン図を必須とする形式である。例えば図6のように右をG染色歌群の集合、左をH紅葉の要因歌群の集合とする

と、重なる箇所がE時雨・露の歌群となる。これをもとに各景物の詠み方を小グループとして書き入れるとどうなるかや、26の竜田姫は染色しているので共通部分のEに入れるべきか、そう考えたと17は神奈備の森が動作主であり26と小グループにできるか等、和歌の類型を要素と集合として捉える学習ができる。こちらは難易度が上がるが、図や画像は教育学において「非連続型テキスト」として重要な教材ないし教育法とされる¹⁾。この点でも本教材案は有効な教育効果が見込める。

二つ目は、常緑樹の変色しない性質を詠んだ歌群である。

I 常緑樹と紅葉

27 ちはやぶる神垣山の榊葉は時雨に色も変らざりけり

〔後撰集〕四五七・詠人不知

28 時雨つつ日敷ふるとも愛宕山榊が原の色は変らじ

〔堀河百首〕九〇六・藤原頭仲

29 我が恋は松を時雨の染めかねて真葛が原に風騒ぐなり

〔新古今集〕一〇三〇・慈円

27は榊、28は地名榊原の榊、29は松であり、当然だがいずれも紅葉しないことが詠まれる。なお時雨・露以外で不変を詠む歌例は「置く霜に色も変らぬ榊葉に香をやは人の留めて来つらむ」〔貫之集〕一九〕等、霜が比較的多い印象を受ける。

右のうち29は特に注目される。29は第一学習社の『言語文化』に採録されており、すでに教材となっている。高校一年には難解な一首だが、新古今調の名歌といえよう。「年経れどしるしも見えぬ我が恋や常盤の山の時雨なるらん」〔清輔集〕一三三〕が先行歌として確認でき、参考にされた可能性がある。藤原清輔の用いた比喻も疑っているが、慈円歌はそれに輪をかけて複雑である。また長谷川範彰氏は「我が恋は」句の表現史を論じており²⁾、29の構造を理解する上で参考になる。

発問例として、Iのうち29のみを取り上げて「慈円歌における比喻を説明せよ」が提示できる。ひねりのない発問だが、右の清輔歌を補助資料とすることで、時雨が紅葉を発生させる詠み方の段階的な変遷を学習させることができる。ただ前提知識がなければ解答が困難なため、恋歌の詠み方のパターンをいくつか紹介する等の事前準備が必要となる

う。

別の発問として、I全体を取り上げて「なぜこの歌群は紅葉しないのか」とシンプルに問うのもよいだろう。教授者が「常緑」と言わなければ五節の内容がミスリードとして機能し、意外と考察を要する問題となりえる。「常盤なる松の絶え間の紅葉葉をいかで時雨の分けて染めけん」(『玄玉集』七〇三・藤原公重)などは、松と落葉樹を対比したり、「常盤」の語を含んでいたりとヒントに使える。さらにこの発問は生物基礎の「バイオーム」と深く関連するという利点もある。生物の専門家の協力が得られれば教科横断的な課題を作成できる可能性がある。

より和歌の考察に重点を置く発問としては、「なぜ各首は変色しないことをわざわざ詠むのか」が提示できる。解答例としては、27は「神域の神々しいイメージを表現できるため」、28は「櫛が原というユニークな歌枕を詠みこなすため」、29は「表に出せない恋心またはうまくいかない恋模様を表現するため」等があげられる。28は歌枕を学習していないと難解すぎるため、誘導が必要となるう。

ちなみに「霜にだに枯れずと聞きし榊葉のいかなる秋に紅葉しぬらむ」(『大斎院御集』三六・女別当)は「同じ頃、榊の葉紅葉たるを、珍しきものかな」という詞書を持ち、本当に紅葉した榊についての歌である。どのような状態の

葉かはわからないが、生物との教科横断に資する可能性があるため付言しておく。

以上、本節も一つの教材案を示した。Hは古典和歌の多様さを学習させながら情報を整理させる案、Iは教科書採録歌や生物科目の内容を積極的に活用する案だった。Hはこの単元のまとめとして据わりのよい内容、Iは検定教科書なるべく活用しようとした内容である。

八 ままとめと展望

以上、本稿は古典和歌を理科と対比させるというコンセプトのもと、古典和歌特有の発想方法と歌例を学習させる教材案を示した。前半では水底に反射した像が映るという発想及び表現方法を、物理科目の内容と対比させた。後半では時雨や露が紅葉を発生させるという発想及び表現方法を、生物科目の内容と対比させた。

本教材案の課題としては、まず教科横断のメリットを十分に活かすきれていないことがあげられよう。学習目標はあくまで古典和歌の特質を学習させることだが、物理や生物の教育法の知見があればより多くの学習効果が期待できる。それらが古典和歌の学習をさらに促進させる可能性もある。

また高校生を学習者に想定した場合、全体的な難易度の高さが懸念される。一応、ほとんどの教材と発問は現代語訳を付しても機能するため、単語や文法のハードルは容易に下げることができる。教材に用いる歌数を絞るのも有効で、稿者の模擬授業も歌数をかなり絞って実施した。

本教材の利点としては、複数の和歌を比較検討させる取り組みが随所に発生することがあげられる。和歌は散文に比べ解釈が難しいが、短詩であるため比較読解はさせやすい。PISA型読解力や共通テストの出題形式に代表されるように、複数の資料を比較させる教育法は長らくトレンドである。稿者も、比較読解能力は批判的思考力や情報処理能力に直結する重要なものだと考えている。

もともと、本教材案はトレンドの教育法と軌を一にする箇所を持つものの、それらは二次的な調整や授業デザインの結果である。本教材案の出発点はあくまで、現代人の頭で生きている学習者に古典の特質を示したい、古典の特質を考察してほしいという欲求である。

教科教育法では、何を学ぶかという問題、どのように学ぶかという問題、そして指導要領が掲げる資質・能力の問題が複雑に絡み合う。このうち、何を学ぶかは膨大な作品群の探査と吟味を要する。しかし、これを疎かにすれば国語教育は先細りしていくだろう。稿者は何を学ぶかという問題を最

重要視しながら、今後も新奇性のある教材開発を目指す。

※引用は、『永承六年』夏六条齋院禊子内親王歌合』は「平安朝歌合大成 増補新訂」に、『海人手子良集』は「新注和歌文学叢書」に、それ以外の韻文学作品は「新編国歌大観」に、『土佐日記』は「新編日本古典文学全集」に、『日本紀略』は「新訂増補国史大系」に、『芸文類聚』は中文出版社、一九八〇年に、『全唐詩』は中華書局出版、一九六〇年にそれぞれよった。韻文学作品は適宜漢字をあてルビを振った。

注

(1)大塚誠也「既習者が再び短歌と出会うとき―導入の工夫と実作の手引き―」(『早稲田大学国語教育研究』第三七集、二〇一七年三月)。

(2)関連書籍は枚挙にいとまがないが、例えば勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(文学通信、二〇一九年)等。

(3) <https://www.youtube.com/watch?v=EnMVs4AQac>

(二〇二二年一月三日現在視聴可能)。

(4)梶川信行「古すぎる教科書の万葉観」(梶川信行編『おかしいぞ! 国語教科書 古すぎる万葉集の



読み方』笠間書院、二〇一六年)、梶川信行・野口恵子・佐藤織衣・鈴木雅裕・佐藤愛「高校「国語総合」の教科書、全二十三種

- を徹底解剖」（同上）、小林賢太「教科書の和歌教材」（勅撰集）と〈私家集〉」（『日本文学』第六七卷第五号、二〇一八年五月）、大石真由香「中学校国語教科書における和歌教材を考える授業実践―定訓のない歌を教科書に載せることについて―」（『岐阜聖徳学園大学紀要〈教育学部編〉』第六〇集、二〇二二年二月）、中村佳文「うたを重ねる―和歌短歌・和漢比較教材とメディア文化」（『中古文学』第一〇七号、二〇二一年五月）。
- (5) 畑綾乃・小松俊介「教科横断型授業実践（美術科×国語科）―Artと言葉―」（筑波大学附属高等学校『研究紀要』第六三卷、二〇二二年三月）、阿久津慎也・今野百恵「生徒の課題価値の変容を促す授業実践研究―異教科ティーム・ティーチングの可能性―」（『宮城教育大学教職大学院紀要』第三号、二〇二二年三月）。
- (6) 中川一史・小林祐紀・兼宗進・佐藤幸江編著・監修『カリキュラム・マネジメントで実現する学びの未来 STEAM教育を始める前に「カリキュラム・マネジメント実践10」』（翔泳社、二〇二〇年）等。
- (7) 井村有里・田中寛子『枕草子』「春はあけぼの」にみる十種雲形―地学・古典教科横断型の試み―」（『大阪教育大学紀要 総合教育科学』第七〇巻、二〇二二年二月）、井村有里・西村聡太郎・田中寛子・岡本義雄『源氏物語』「野分」の台風分析―教科横断型授業の提案―」（『みんなの地学』第三号、二〇二二年六月）、峯悦子・下村香菜子・藤井佑介「高等学校における生徒の思考の活性化を促す教科横断的な授業実践」（『長崎大学教育学部教育実践研

究紀要』第二一号、二〇二二年八月）。

- (8) 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九〇年）、久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）の石川泰水執筆「底」項。
- (9) 渡辺秀夫「紀貫之の和歌と漢詩材」（『平安朝文学と漢文世界』勉誠出版、一九九一年）。
- (10) 長谷部剛「賈島「棹穿波底月、船壓水中天」の生成と流伝について」（『関西大学中国文学会紀要』第四二号、二〇二二年三月）。
- (11) 神田龍身『貫之集』―はじめに屏風歌あり』『土佐日記』―言葉と死』（『紀貫之』ミネルヴァ書房、二〇〇九年）。
- (12) 一瀬恵理『貞元二年（九七七）八月十六日三条左大臣頼忠前栽歌合』をめぐると一考察―中国的な語句の使用について』（『橘の会』小論』第九号、一九九一年三月）、一瀬恵理『水上秋月―題歌をめぐって―詠歌の場としての』貞元二年三条左大臣頼忠前栽歌合』（『橘の会』小論』第一〇号、一九九二年三月）、一瀬恵理『貞元二年三条左大臣頼忠前栽歌合』をめぐって―宴中和歌にみられる沈倫歌―（『橘の会』小論』第一一号、一九九三年三月）、山本真由子『三条左大臣殿前栽歌合について』（『平安朝の序と詩歌―宴集文学攷―』塙書房、二〇二二年）。
- (13) 北井佑美子『貫之集』解釈上の問題点―素寂本を手がかりに―（関西大学『国文学』第九二号、二〇〇八年三月）。
- (14) 萩谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂 第二巻』（同朋舎出版、一九九五年）の一〇四五―一〇五六頁。

(15) 鈴木宏子「もみじと錦の見立て」の周辺―和歌と漢詩文の間―

(犬養廉編『古典和歌論叢』明治書院、一九八八年)、鈴木宏子
『古今集』における〈景物の組合せ〉―花を隠す霞・紅葉を染める露―(『国語と国文学』第六六卷第一二号、一九八九年一月)。

(16) 森田直美「『黄葉』と『紅葉』―上代から平安へ、表記移行の要因に関する一試論―」(『平安朝文学における色彩表現の研究』風間書房、二〇一一年)。

(17) 例えば佐々木基成「図像を用いた解釈・説明力育成の試み―石田徹也の作品を教材として」(『早稲田大学国語教育研究』第三〇集、二〇一〇年三月)。

(18) 長谷川範彰「我が恋は」ではじまる和歌とその変遷―八代集所収歌を中心に―(『中古文学』第九八号、二〇一六年十二月)。

(おおつか・せいや 本学准教授)